仰

ケルヲ、舟田入道ト大將ト二人手ニ手ヲ取組テ、ユラリト飛渡リ給フ、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

居野七郎是ヲ見テ、敵ニ氣ヲ付ジト、秋山ガ臥タル上ヲ、ツト飛越テ、爰ヲアソバセト、射向ノ袖ヲ敲テ、小跳シテ進タリ、

〔陰德太平記五〕相合就勝謀反附生害之事

上總介就勝ハ、九郎義經ニモ不劣輕業兵法ノ達者ニテ、鎗ヲ提、爰ヲ最後ト振舞レタリ、〇中略就勝逐北テ深入シ給所ニ、敵取テ返シケレバ、門前ノ土橋ヘハ引事ヲ不得、面三間ノ隍ヲ、閃リト飛テ渡リ給フヲ、寄手ノ者共是ヲ見テ、アラ恐シノ行迹ヤ、葛城高天ノ岑ニ住ナル、大天狗ノ變化ニヤト、不覺舌ヲ卷、心ヲ寒シテ立タリケリ、

〔甲子夜話十〕予〇松浦清ガ下邸ノ邊、辨天小路ト云ニ、某ト云ル御家人アリ、此人三尺バカリノ棒ヲ持テバ二丈許ノ處モ、少シ足ガヽリ有レバ躍上ル、又高處ヨリ跳下ルモ、三丈計ハ自在ナリ、又七尺バカリノ高キ所ハ、足ヲ擧テ踶ルコト、自由ニスルトナリ、奇ナル事ナリ、

〔類聚名義抄一人〕俯仰フシアフク　下奐掌反　アフク　和カウ

〔伊呂波字類抄安辭字〕仰アフク擧也、偃也、

〔倭訓栞前編二阿〕あふぐ　仰をよめり、あふのくともいふ、天に向くの義也、神代紀に擧目をよめるは義訓也、

〔日本書紀二神代〕時彥火火出見尊就其樹下、徒倚彷徨、良久有一美人、排闥而出、遂以玉鋺來當汲水、因擧目視之、乃驚而還入、〇下略

〔日本書紀二神代〕一云、豐玉姬之侍者、以玉瓶汲水終不能滿、俯視井中則倒映人笑之顏、因以仰觀有一麗神倚於杜樹、故還入白其王、